



県内における高病原性鳥インフルエンザの発生とウイルスの特徴

岩手県中央家畜保健衛生所

2004 年に国内の家きんににおいて 79 年ぶりに発生した高病原性鳥インフルエンザ（HPAI）は、**2020 年以降、5 シーズン連続で発生**しています（図表）。今シーズンの発生は、2024 年 10 月に北海道で確認されて以降、2 月 11 日時点で 14 道県 51 事例の約 934 万羽が殺処分対象となりました。1 月には発生が急増（5 県 34 事例、約 607 万羽）し、そのうち 32 事例を岩手県（5 事例、123 万羽）、愛知県（13 事例、144 万羽）及び千葉県（14 事例、325 万羽）が占め、それらの多くは **10 万羽以上を飼養する大規模採卵鶏農場**でした。過去最多の発生となった 2022～2023 年シーズンには、殺処分数は 1,771 万羽に上り、鶏卵の価格高騰が起きましたが、今シーズンはそれを上回る状況が懸念されます。

今回は、2024～2025 年シーズンの県内における HPAI 発生状況と近年の HPAI ウイルスの特徴について、概要を御紹介します。

表 各シーズンの初発及び最終確認日

		HPAI 流行シーズン（9 月～翌年 5 月）				
		2020-2021 (R2 年度)	2021-2022 (R3 年度)	2022-2023 (R4 年度)	2023-2024 (R5 年度)	2024-2025 (R6 年度)
野鳥	初発	10 月 24 日	11 月 8 日	9 月 25 日	10 月 4 日	9 月 30 日
	最終確認	3 月 3 日	5 月 14 日	4 月 19 日	4 月 30 日	?
家きん	初発	11 月 5 日	11 月 10 日	10 月 28 日	11 月 25 日	10 月 17 日
	最終確認	3 月 13 日	5 月 14 日	4 月 7 日	4 月 29 日	?

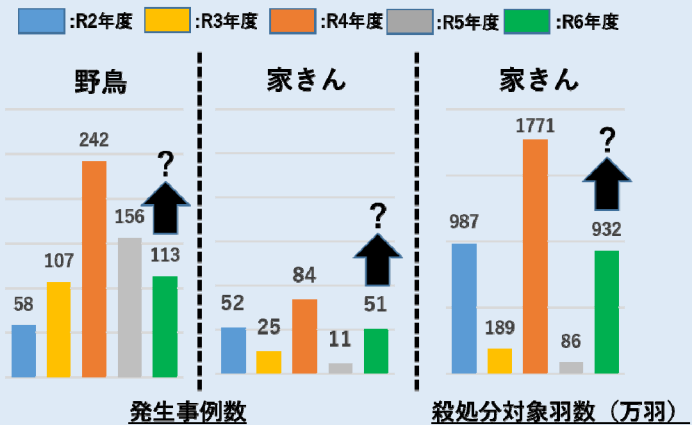


図 各シーズンの発生事例数及び殺処分対象羽数

1 HPAI 発生状況

2025 年 1 月 1 日、盛岡市の採卵鶏農場（約 12 万羽飼養）から鶏の死亡羽数が増加しているとの連絡がありました。異常鶏は、当所で実施した簡易検査と PCR 検査により、1 月 2 日に HPAI の疑似患畜と診断され、飼養鶏の殺処分が開始されました。同疑似患畜は、農研機構動物衛生研究部門で実施した精密検査により、H5N1 亜型 HPAI の患畜と診断され、本事例が今シーズン県内初の HPAI 発生となりました。

1 月 5 日、軽米町の肉用鶏農場（約 5 万羽飼養）で本県 2 例目となる HPAI が発生し、さらに 1 月 11 日、22 日には 1 例目の農場と同じ地域にある採卵鶏農場 3 戸（各 30～40 万羽飼養）において本県 3～5 例目となる HPAI が発生しました。軽米町における発生は単発でしたが、盛岡市では同一地域にある大規模採卵鶏農場での連続発生となりました。

2024 年 11 月と 12 月には盛岡市内で回収された死亡ハクチョウ 2 羽から H5N1 亜型 HPAI ウイルスが検出されていました。連続発生の背景として、盛岡市内の環境中に多くの HPAI ウイルスが存在し、同地域内の養鶏場における感染リスクが極めて高い状況にあったことが考えられました。これまで県内では、HPAI の同時多発的な事例はなく、殺処分などの防疫措置に係る対応は困難を極めました。国、他道府県、県内全市町村、岩手県建設業協会や岩手県バス協会などの関係団体、民間企業、陸上自衛隊岩手駐屯地の皆様の協力・支援の下、1 月 31 日に、全ての農場における防疫措置を終えることができました（一連の防疫対応は 3 月 1 日に終了予定）。

HPAI の県内連続発生を受けて、「農林水産省鳥インフルエンザ岩手県現地防疫対策本

部」が設置されました。同対策本部からは、愛知県や千葉県で実施されている取組として、鶏舎の換気口への不織布の設置や消毒薬の散布、発生農場周辺の一般道への消毒薬の散布について情報提供がありました。また、寒冷地ならではの対策強化のポイントとして、①低温下で消毒効果を高めるための消毒薬の高濃度使用、②農場内の車両消毒の徹底、③飼養衛生管理の点検・改善の改めでの周知についての助言もありました。これらを踏まえ、盛岡地域の養鶏場には、まん延防止対策として、①車両や長靴に用いる消毒薬の高濃度使用、②タイヤを確実に消毒するための石灰帯の設置幅の拡張、③対策として見落としがちな除雪車両など農場専用車両の確実な消毒を指導しています。県内全域においても、前述の農場出入車両等の消毒強化に加え、県内の全家さん飼養農場 501 戸に消石灰を配布し、緊急消毒を実施しました。

2 HPAI ウイルスの変化と近年の特徴

H5亜型の HPAI ウイルスは、1996 年に中国広東省のガチョウから分離されたウイルスが起源とされています。発見から約 30 年間、同ウイルスの変異や他の AI ウイルスとの遺伝子再集合を繰り返し、現在も変化を続けています。2004 年（冒頭の国内発生時期）には中国周辺国に局在していましたが、以降は欧州、西アジア、アフリカへと拡がりしました。2020 年以降の HPAI ウイルス（クレード 2.3.4.4b）は急激に世界中へ拡散する能力を獲得しました。2021 年には北米、2022 年には中南米、2024 年には南極でも感染が確認され、オセアニアを除く世界中の野鳥や家きんに感染し、それに伴い哺乳類への感染例数も増加しています。

クレード 2.3.4.4b の HPAI ウイルスは、2019 年以前の流行ウイルスと比べて、①渡り鳥である「カモ」や留鳥である「カラス」の体内で増殖し易く、大量に排泄されること [1]、②多種にわたる哺乳類（陸生、半水生、水生）への感染 [2] が報告されています。これらの特徴により、本ウイルスは過去にないほど広範かつ持続的な流行を引き起こしていると考えられています。国内でも、死亡カラスの感染事例の増加やその死骸を捕食したキツネやタヌキの感染事例も報告されるようになりました。

近年、採卵鶏農場が肉用鶏農場に比べて HPAI の発生が多い傾向にあります。採卵鶏農場では鶏卵や鶏糞の搬出など鶏舎内外の出入りの機会が多いほか、鶏舎内や堆肥舎にある廃棄卵によりカラスが誘引されることなどが考えられます。農場周辺にカモ類、カラスなどの野鳥や野生動物の痕跡が認められる場合は要注意です。

本病発生のトップシーズン（1 月）は過ぎましたが、渡り鳥の北帰行により 2 月以降も本県の発生リスクは高い状況が続きます。近年の HPAI ウイルスであっても対策は変わりません。引き続き関係者一丸となって対策を継続する必要があります。日頃から飼養鶏の健康観察を行い、疑わしい症状を発見した際は速やかに家保に連絡することが大切です。

3 参考文献

- [1] James J, Billington E, Warren CJ, et al. Clade 2.3.4.4b H5N1 high pathogenicity avian influenza virus (HPAIV) from the 2021/22 epizootic is highly duck adapted and poorly adapted to chickens. J Gen Virol. 2023;104(5):10.1099/jgv.0.001852.
- [2] Plaza PI, Gamarra-Toledo V, Eugu í JR, Lambertucci SA. Recent Changes in Patterns of Mammal Infection with Highly Pathogenic Avian Influenza A(H5N1) Virus Worldwide. Emerg Infect Dis. 2024;30(3):444-452.

※「病性鑑定通信」は、当所で実施している病性鑑定から、今後の診断の参考になる症例、注意喚起等が必要な情報等をまとめたものです。なお、中央家保ホームページには、過去の記事も掲載しています。
「病性鑑定通信」へのリンクは↓こちら↓です。または、「岩手県中央家畜保健衛生所 病性鑑定通信」で検索してください。
<https://www.pref.iwate.jp/sangyoukoyou/nougyou/desaki/chuuou/1008059/1047433/index.html>